

宇宙生命哲学

82

こととはじめ

北里環境科学センター
名誉顧問／宇宙生命哲学者

伊藤 俊洋

2025年のノーベル賞

例年、10月の第1週はノーベル賞の発表が世界中を駆け巡る。今年、日本では、大阪大学の坂口志文博士が「免疫が抑制される仕組みの発見」で、生理学・医学賞に輝いた。また、京都大学の北川進博士が「金属有機構造体の開発」で化学賞に輝いた。ノーベル賞を2人の日本人が受賞するのは、2015年の大村智博士（生理学・医学賞）と梶田隆章博士（物理学賞）以来。受賞者は、7日から9日の間に、授賞対象に関する歴史や背景について公開講義を行い、YouTubeで配信される。この混沌とした世界に対して、各分野の受賞者は、どのようなメッセージを発するのだろうか。

ノーベルの命日の12月10日には、ストックホルムとオスロで授賞式が行われる。今年のノーベル賞を簡単に

紹介する。

生理学・医学賞は、坂口博士（挿画1段目右）と共に、米国システム生物学研究所のメアリー・フランコワ博士（同左）と、米国ソノマ・バイオセラピューティクス社のフレッド・ラムメル博士（同中央）が受賞した。

化学賞は、北川博士（2段目左）と共に、豪メルボルン大のリチャード・ロフソン博士（同中央）と米カリフォルニア大バークリー校のオマー・ヤギー博士（同右）が受賞した。

物理学賞は、「量子トンネル効果などの量子技術の基礎研究」に貢献した米国の3名の研究者、カリフォルニア大バークリー校のジョン・クラーク博士（3段目左）、同大サンタバーバラ校のミッシェル・デボレ博士（同中央）とジョン・マルティナス博士（同右）が受賞した。

文学賞は、ハンガリーの作家クラスナホルカイ氏（4段目左）が、「終末的な恐怖のさなか、説得力と予見性のある作品により、芸術の持つ力を再認識させた」として受賞した。同氏は日本との関わりが深く、京都を舞台にした03年の小説「北は山、南は湖、西は道、東は川」は邦訳されている。

平和賞は、ベネズエラの野党指導者で、反体制派の活動家マリア・マチャド氏（4段目右）が、「ベネズエラ国民のための民主的権利の促進に向けて、絶えず活動し、独裁からの公正かつ平和への移行を実現するために闘った」として受賞した。

経済学賞は、米ノース・ウエスタン大のジヨエル・モキア教授（5段目左）、フランスの高等教育機関「レージュ・ド・フランスのフリップ・アギヨン教授（同中央）、米ブラウン大のピーター・ホーウィット教授（同右）が受賞した。受賞理由は、「技術革新が促す持続的な経済成長と、その解析を評価したものである」。



肖像画

ニクラス エルムヘッド ©ノーベル賞普及活動